

ヨーロッパの社会環境について —民族と国家の立場から—

後 藤 信*

A Study of the Social Environment of Europe —especially from the perspective of Nation and State

Makoto Gotoh*

On the 24th of March in 1999, when NATO air strikes on Serbia began, I happened to be staying in Germany, the geographical situation of which is only a short flight from Macedonia, NATO's military operation base at this time. Kosovo was once an autonomous province in the former Yugoslavia but it is now under direct rule of the Serbian Government, the president of which is infamous for his narrow-minded ethnic policy of his state. I am hesitant to give a justification of the procedure of any friendly group of nations' interference in the home affairs of another independent state before the agreement of the United Nations as well as the cause of separatists' violent activities to their government to regain their lost self-determination.

However, the Serbians' brutish way of driving Kosovo-Albanians out of their homelands is totally unacceptable, because human rights should as a matter of course be highly valued as we approach the turn of the century.

For us to understand the Kosovo problem and to keep the whole of Europe in peace, the knowledge of ethnic feeling with the historical background is a must. I would like to analyze and explain the rise of the troubles from the beginning in order to draw an objective conclusion with my detached feeling as a Japanese.

Key Words (キーワード)

Unification and Disruption of the States (国家の統一と分裂), Nation's Self-Determination (民族の自治), the Oppressed Nationalities (抑圧された民族)

は じ め に

1999年3月24日から4月4日迄の間、私は春季休業中の期間を利用して私的な視察目的に基づいてドイツ各地に滞在していた。私が離日した正にその日、3月24日は偶然にもコソボ紛争の解決を求めて、NATOによる新ユーゴに対しての空爆が始められた日となったのである。

空爆の行われているコソボから空路で僅か二時間という至近な場所に、無組織の旅の身で、身一つをおいているという孤独な実感はひしひしと迫ってきた。空爆の進展については情報が十分に把握出来ず、詰まる所、ホテルでの自室テレビが唯一の情報入手源であった。テレビ画面には普段でも強面に見えるロシア大統領エルツインの顔が、更に激しさを加え、見るからに立腹した表情となっ

*呉大学社会情報学部 (Faculty of Social Information Science, Kure University)

て、ロシアにおける街頭での一般の人々の激昂の叫びに合わせるかのような形で大きく映し出されて一層私の不安を掻き立てた。食堂で偶々向かい合せて座っていたニューヨークから来ていた米国人記者にその事を訊ねたら 'Yeltsin is not angry, just upset.' と言っていたのでやや安堵の胸を下ろしたものの、不安な気持ちは色々と想像力を膨らませるものである。同じスラブ民族としてセルビアとの文化を共有し、心情的にもセルビア寄りの姿勢を保ってきたロシアがこの問題で今後どう関わってゆくのか。市場経済制度を導入した後、ロシアの国家運営が必ずしも上手くいっているとは言えない。加うるに、嘗てソ連との軍事同盟ワルシャワ条約機構に加盟していたポーランド、チェコ、ハンガリーの東欧三ヶ国が、その当時、敵対関係として対峙していた相手陣営の北大西洋条約機構NATOに空爆開始直前の99年3月に加入したばかりであった。更に引き続き、その他の旧東欧諸国や旧ソ連邦の一員であったバルト3国さえもNATOへの加入を望んでいるという。今、つまり、1999年がNATOにとっては創立50周年を祝う栄光の時であっても、ロシアにとっては苛立ちの「時」であった事が私の不安材料の一つとなっていた。

この時期はまだドイツ一般市民の今回の空爆への反応は鈍いように感じられた。北緯50度近くの寒冷地域に住む人々は長い冬の間の極寒の桎梏から漸く解放されて待ち望んでいた春の陽光を求めて街路に、Marktplatz にその足を向けている。或る人達は春風に乗って人々の嗅覚をくすぐる焼きソーセイジを売る屋台の前に集まり、別の人達は辻音楽師や手回し風琴の演奏を輪になって聞き入り、或いはオープンカフェに腰をおろして談笑を楽しんでいた。ゲーテは南の国イタリアに憧れてその気持ちを「君よ知るや南の国」の詩の中で歌い、ハイネは「すべての蕾、花と開く美しき五月」と表現している。それらは待ちわびた春の訪れを告げるなべて生きとし生けるものが色彩、音、動き、芳香、そして言葉を通して奏でる自然の調べであり、新しい季節の胎動である。人々がこの

復活祭のこの時季に、その気持ちを、春の歓びを、明るい日差しの下で合唱しているように感じられた。太陽の回帰と自然及び人々の生命の営みが再開されるこの季節の到来を祝福し、いわば春の祭典と平和な世界への歓喜を謳歌している姿が印象的であった。

4月3日、ニュールンベルグでは教会の facade の薔薇窓の下に NO KILLING AT EASTER と英語による文字アピールが大きく掲げられていた。そして僅か十数人の小規模編成で繁華街を行進している空爆反対のデモグループに出会った。プラカードに記された文字 Bomben bringen KRIEG Keinen Frieden は北爆から泥沼の地上戦へと移行していったヴェトナム戦争との不吉なアナロジイを想起させた。万一、地上戦に発展したならば、NATOの結束は最後まで保たれるのか。隣国のアルバニア、マケドニア、ブルガリア、更にギリシャ、トルコなど、それぞれ別々の国情、歴史、民族分布、宗教を持つ国々である。そしてユーゴとの連鎖的な関わりを持っている。このバルカン半島、別名バルカンの火薬庫が火を噴いたならばアメリカはどのようにして最終的な事態の収拾を図るであろうか。空爆、その軍事介入はルビコン河を越えようとする危険な「賭」の始まりとなるのではないか。…と。そのプラカードに記された短い文字のドイツ語は道行く人々に実に多くの疑問点を問いかけているように思えたのであった。

※ balkanize....divide an area into small antagonistic states....COD

そもそも今回の旅行の目的は1989年に起こったベルリンの壁崩壊の後10年間が経過した今という時間上の節目を捉えて、旧西独に事実上吸収合併された旧東独の各地が社会主義時代の名残りを風景の中にどのようにとどめ、そして又その後どのように変貌を遂げ、新国家に融合しているかを自身の眼で感じ取る事にあった。鉄のカーテンが除去されて後、東西ドイツのように分断国家の統一が行われた反面、ユーゴスラビアやソ連のように統一していた連邦国家がばらばらに分解してしまった例も生まれた。

嘗て東西世界を閉ざしていたその象徴の役割を演じていたベルリンのブランデンブルグ門は無言ではあるが訪れた人々に多くを語りかけてくれる。それはパリのエトワール広場に立つローマ風の華麗な造形美を誇るナポレオンの凱旋門とは違った趣を備えている。アテネのアクロポリスの丘に建つ神殿を模したこのブランデンブルグ門は、類似建造物であるロンドン大英博物館の正面玄関のように展示品を用意して来訪者を待っている訳ではない。それは訪問者、とりわけ日本人の目を強く惹き付けて離さないように思う。多分日本人の心の奥深くにしまってある過去の多くの記憶を呼び覚ませ、同時に様々な画像を提示する力があるということであろう。第二次世界大戦前の日独両国民それぞれ沸き上がった民族感情の高揚と両国の緒戦段階での束の間の勝利の輝き、その後の戦局の悪化と空爆による恐怖、敗戦による戦勝国の占領、海外から強制送還された多数の同胞の迎え入れ、廃墟の中からの復興、冷戦下における米ソの思想戦がもたらした国内への影響と国論の分裂や混乱など、ドイツの人々と経験を共有した何十年にわたる出来事が歴史と共に生き延びたこの建造物の姿の中に一つとなって凝縮され、それを見上げる人々の心に、歴史が、そして人間が一体何であるかを啓示しているようでもあった。

ベルリンとコソボ、これを一つの軸に据えてヨーロッパにおける国家の統一と分裂、社会主義国家の崩壊と民族問題の再燃などの因果関係を一つのテーマとして何としても纏めてみようと思い立ったのはその時である。空爆は11週間の後、停止した。コソボにはNATOにロシアをも含めたKFOR軍が配置され一応の治安は回復されたかの感はある。然し火種となった民族紛争の根本問題、民族間相互に横たわる憎悪は現在も尚、最終的に解消してはいない。他の国々に較べて民族問題が社会生活の中で問題化する事の少ない日本において人々の心は一国平和主義が支配的で、とかく insularism に陥りやすい。この insular な日本人が国際問題に眼を向け、国際理解を深めようとする場合、言葉と同時に外国の文化や民族問題な

どその背景をなす歴史への理解も大切となろう。

この点を view-point として1989年のヨーロッパの激動の一ページを拡大して眺めてみようとするのがこの小論の目的である。

ヨーロッパにおける民族問題とその社会環境

I 民族自決権と大戦間期のドイツ

ベルリンの壁が崩壊したのは1999年の現在を遡ること10年の1989年の出来事であった。その1989年はフランス革命200年を記念する年に当たっていた。その革命記念日、パリ祭にシャンゼリー通りを華やかなパレードを中心とした盛大な絵巻物 pageant が繰り広げられたのは人々の記憶に新しいものがある。

その1989年は単にフランス革命の200年祭として歴史上の意味を持つ年であるばかりではない。その年は又第二次世界大戦の火蓋の切られた記憶すべき年の50周年にも当たっていた。今日では第一次及び第二次世界大戦を一括りにして20世紀世界における30年戦争として区分し、とらえた方が歴史的な解釈を行う上でより分かり易いと説く歴史家もいる。

第一次世界大戦はセルビア人の多くが住むボスニア地域をハプスブルグ帝国オーストリア＝ハンガリーが支配している事への抗議のメッセージを一セルビアの民族主義者が首都サラエボ訪問中のオーストリア皇太子殺害というテロ行為の中で示した事に端を発している。

近世における国民国家英仏の歴史の舞台への登場、ビスマルクによるドイツ統一民族国家の実現、王権神授説の絶対王政から主権在民国家、民族国家への脱皮、即ち全国民が国防に参加する徴兵制度に基づく国民軍や、投票によって人々が国政に参加する議員議会制制度の創設、など一連のヨーロッパにおける思想や政治制度上の歴史の動きは、オーストリア＝ハンガリー、オスマントルコ、ロシアなどの多民族帝国の下でそれまで甘んじていた少数民族の民族的な自覚を覚醒させた。その駆動力は demos としての国政参加意識よりも寧ろ

同じ文化共同体の一体化とその帰属意識 *ethnos* の方に向けられた。それぞれが民族、国家、国土の一体化された民族国家の樹立を求めて始めた民族独立運動が各地で澎湃として興っていた。サラエボ事件のあと、外交上の結末としてオーストリア側はセルビアへ宣戦布告を行った。セルビアと同じスラブ系民族であるロシアはセルビアを、そして同じ言語文化圏のドイツはオーストリアへの支持を示し、友邦国支援の大義を掲げて真っ先に参戦する。

世界戦争に発展したその大戦の処理として数百年も続いていたオスマン帝国、ハプスブルグ帝国を解体させ、第二ドイツ帝国の領土を削って東欧及びバルカン地域に新興独立諸国家を誕生させたのは何のためであったろうか？ 国際連盟の提唱者であった学者出身で理想家肌の米国大統領 ウッドローウィルソン は「多様な文明、人種、言語」の尊重、民族の自決と国際連盟の下での国家間の「共生」、を掲げて世界の外交の表舞台に登場した。民族の自決を達成すると言う彼の高邁な主張に対して、当時の世界の現実はそれに程遠いものであった。大戦後のヨーロッパにおいて、チェコスロバキア、ポーランドなどの民族自治国家が誕生した。少数民族の自決権、独立を認めたと言う点ではヴェルサイユ条約の精神は確かに生きているように見えた。然し、その新しく生まれた諸国家とドイツなどとの国境の線引きも民族自決の点からすれば実に不完全なものであった。400万人を優に超えるドイツ系住民がチェコスロバキア、ポーランド、ルーマニアなどに、そして300万人余りのハンガリー人がチェコスロバキア、ルーマニアなどに少数民族として残されたのである。単一民族国家形成というその時代の *trend* の中で、それは新たなディアスポラの出現となった。ドイツ系住民がその多くを占めるズデーテン地方に見られるように国内に少数他民族を持つチェコスロバキアのような新生国家はいわば城内に「トロイの木馬」を抱え込んでいた事を後になって痛く思い知らされるのである。当時では明らかにその線引きによってドイツの再度の台頭を押さえ込み、戦勝国、

フランスのヨーロッパ大陸における安全保障を確実にしようとするのが新国境画定の本意であった。又、ユダヤやクルドなどの民族宗主国を持たない民族の民族自決権の問題も依然未解決とされたままとなっていた。英仏を主として植民地支配を受けるアジア、アフリカにおける民族国家の問題は手つかずのままであった。ましてウイルソンのお膝元アメリカにおいて少数民族となっているアフリカ系黒人への公民権の配慮など一瞥もされていなかった。Jim Crowism が堂々とまかり通っていたのである。その他、アメリカは1924年に移民法を制定し、非白人への移民の門を閉ざし、日本からの移民の数をゼロとする措置を行っていた。

「自由の女神」は大西洋に向けてのみ、その慈愛あふるる優しさの表情を見せていた。その手に握られたトーチで煌々と海面を広く遠くまで照らしてヨーロッパからやってくるさまざまな移民、難民のための今後の生活の力強い道祖神となっていた。然し、太平洋には全く冷たく背を向けていた。加うるにアメリカ原住民を保護のために強制的に閉じこめる「保留地」*reservation* があり、それはアメリカ原住民指定の居住地、動植物の保護区にも似た隔離地区であった。

第一次世界大戦開始迄、ユダヤとアラブの両民族は、それぞれオスマントルコの支配下にあって民族の独立を求めていた。戦時中、彼等の民族自決を願う心を英国は巧く利用した。当時のトルコ領パレスティナを将来ユダヤ民族の独立国家とするとの約束を行う事でユダヤ系財閥には戦費の調達を行い、その一方でアラブにも同様な餌で兵員協力を取り付けるという全く恥知らずの二股膏藥を行ってこの地域の戦争を遂行していた。委任統治領という名の新たな英国植民地となったこの地域で、英国はその後分断政策を行い、両民族相対立の構図の中で対英独立運動の矛先をそらして、なんとか時局を切り抜け、第二次世界大戦の時を迎える。ユダヤ民族は戦時下のドイツ、ポーランドを始め、在外ユダヤ人多くの犠牲を払った第二次世界大戦の後、世界の支持を得てイスラエルの建国を果たす。然しパレスティナ問題を含む今尚

続く中東での民族紛争は実に当時の英国の対外政策に起因しているのである。現在の印パ紛争やキプロス問題なども然りである。その統治下における二つの民族の対立構造を巧く利用し、寧ろ対立状態を作り上げて植民地支配の安泰を図る。これによって現地住民の民族自決の達成を押さえ込んできたのが実に英国であった。

この一連の歴史的な世界の動きは、敗戦そして過酷過ぎるヴェルサイユ講和条件の結果がドイツ民族へ与えた屈辱感を一挙に跳ね返そうとする国民的なエネルギーの爆発となって現れたのであった。そしてナチスドイツの民族自決、ユダヤを始めとする自国内の他民族排除 xenophobic nationalism, ostracism, 他民族を barbarian と見下す意識の蔓延 [語源は古代ギリシャ人が外国人を未開、野蛮だと見なした事に由来]、そして在外永住のドイツ人との民族の一体化、大ドイツ主義 Gross Deutschland へとつけいる口実を与えるものとなった。それまで中欧で誇り高く君臨していたドイツ国民の敗戦による心の傷口に潜む情熱の炎が民族主義という可燃性の spirit に点火した。国粹社会主義と言う国民運動、新国家宗教の中でドイツ人の血は全土で激しく燃え上がった。ドイツ民族の優秀性を謳うナチスによって作り出された民族神話に煽られ、ヒットラーのカリスマ性に導かれてドイツの民衆は狂気の如くにナショナリズムと民族主義 'volksische' movement に身も心も委ねる。

ヨーロッパ大陸各国の力の拮抗させ、その力を相殺させ、均衡を保っておくことによって島国英国の安泰を保つという英国の対ヨーロッパ政策は何世紀もの間続いた伝統に基づくものである。この狡猾にして機略に満ちた英国外交の基本方針はヒットラーによるドイツ第三帝国誕生当時にも踏襲されていた。つまりヨーロッパにおける一国が圧倒的な優位をもって存在感をもたげてくると、その他の国と連携して「出る釘を打つ」というやり方である。第一次世界大戦の結果、従前はヨーロッパにおける大国であったドイツが敗北し、又、ソ連邦としてその体制を変えたロシアも革命の後

遺症で力を弱め、ヨーロッパがフランス一国の力を認めるようになると、英国の心は揺らぐのである。フランスが戦時中は英国の同盟国であったとしても、今のフランスが中心のヨーロッパ秩序を英国は必ずしも好まなかった。一国の単独優位は認めない。したがって1933年ドイツにヒットラー政権が誕生し、その力を台頭し始めた頃、フランスがそれに警戒感を抱いて警告を発しても英国は寧ろ独仏による力の均衡のとれたヨーロッパ体制を暗に望んでいた。ヴェルサイユ条約が禁じた非武装地帯ラインラントにナチス第三帝国が軍を進駐させた時も、仏の感じた危機意識を英は無視した。独の行動を英仏の協調介入で封じようという仏の呼びかけに英国は応じなかった。その後のヒットラーの対外的な増長に対して黙視の結果、独の力が強大になり中欧を制するようになると、独のポーランド問題に強硬に介入するようになる。それが独に拒否されると、仏と共同で対独宣戦を布告した。ドイツ、ポーランドの二国間紛争を世界大戦へと拡大させたのである。

次にはドイツの側から眺めてみよう。英仏を軸とした戦勝国によって課せられた講和条件をドイツはその後、否認し、同じ言語文化圏オーストリアとの合併、更にはチェコスロバキアズデーテン地方の併合問題へと要求を続ける。このような際、ヒットラーが外交交渉の際に常套手段としてちらかしたのが大戦後、その地域では多数を占めながらも所属する国家では少数民族となっていて、その国の主要民族による不当な支配を受けているとされたドイツ系の人達の保護と民族自治の問題である。北部国境に位置しヴェルサイユ条約で失った後も尚その住民の過半数をドイツ系住民で構成されていたメーメル郡の返還要求をリトアニアに対して行い、それを達成した。次の問題として東プロイセンは大戦の結果、ドイツ本土から切り離され、飛び地となっていた。第二次世界大戦以後の西ドイツにおける西ベルリンのように国土形成一体化の上でも不自然であり、自国内の往来にも他国領を跨ぐという不便を味わっていた。そこで東プロイセンへ通じるポーランド回廊を横断して治

外法権の道路と鉄道の建設とダンチツヒ、現在名グダニスクの返還を求めてポーランド政府に迫った。

ポーランドとしてはこの地以外にも第一次世界大戦以前にドイツ領で、そしてその当時でも、ドイツ人の多くが住んでいたポーゼンやシレジア地方を抱えていた。一つを手放せば又次の要求が待っていると考えたポーランド政府は同時に英国の支援を頼みとしてこの申し入れには応じなかった。ドイツが次に打った手は独ソ不可侵条約の締結である。ヴェルサイユ会議では蚊帳の外に立たされていた独ソが新生ポーランドという国家を解体し、ポーランドがソ連の前身国家〔帝政ロシア〕・独両国の手で分割されていた元の状態に復元するという revanchism が密約として含まれていた。これで東からの脅威が取り除かれたドイツはドイツ系住民の保護、領土返還の件でポーランドに強く迫る。拒絶に遭うや、武力に訴えてポーランドに侵攻を行った。第二次世界大戦はその侵攻を阻止しようとした英の介入、そして英仏による対独宣戦布告によって開始されたのである。

II ユーゴスラビア連邦の崩壊とコソボ問題

スロボーダンミロシェヴィッチは1986年、セルビア共産党同盟幹部会議長に、87年、セルビア共和国幹部会議長にと要職を歴任してゆき、89～97年の間セルビア共和国大統領を勤めた。1997年には新ユーゴスラビア〔セルビア共和国及びモンテネグロ共和国より成る〕大統領に就任した。旧ユーゴ連邦時代、政、官、財の主流を一直線に歩んできた彼はユーゴ連邦を構成する最大グループのセルビア民族を掌握した上で、その中央権力をもって連邦下の各共和国をセルビア民族、セルビア共和国中心の権力体制で統治しようとしていた。その偏狭な姿勢は他の各共和国のユーゴ連邦への忠誠心を失わせるに充分であった。嘗て六つの共和国、四つの言語、三つの宗教、二つの文字を持ったモザイク状多民族国家ユーゴスラビア連邦の大統領チトーは各共和国の分権自治を認め、同時に民族主義を押さえ込むという二律背反の政策を巧みに

操作しながら、彼自身のカリスマ性も手伝って何とか連邦全体を統治するのに成功していた。当時ユーゴスラビア連邦の一つ、セルビア共和国の自治州となっていたコソボではアルバニア系ムスリム住民がその殆どで、正教徒セルビア人が少数民族を形成していた。’80年のチトーの死後、ユーゴ各地で民族問題が沸騰してきた。87年4月コソボの地を訪れたミロシェヴィッチに、彼の同胞のセルビア人達はセルビア共和国に住んでいながら、その自治州コソボでは9割を占めるアルバニア系住民に不当に疎外されているとして不満を訴えた。彼はその解決は必ず叶えると力強い返答を行った。程なくセルビア共和国憲法は改正され、コソボは90年9月自治権を剥奪される。コソボはセルビア共和国の直接統治下に入ることになった。自治州の行政担当者、警察官は大量解雇され、民族主義の色合いの強いセルビア人がそのあとに補充された。従来行われてきた母語教育と nationalistic な歴史教育を中心としたアルバニア民族教育は公教育のカリキュラムから外された。

アルバニア系コソボ住民をこのような状態に追い込もうとしているミロシェヴィッチのセルビア同化政策、他民族排除の政治姿勢に警戒感を抱いた他の共和国は、ユーゴ連邦を離れてそれぞれが独立国家としての道を歩もうとし始める。先ずスロベニア、そしてそれを追ってクロアチアが91年6月に独立を宣言する。ユーゴスラビアは各共和国によって人々の所得格差が著しい国であった。丁度、現在のイタリアに見られるように、北高南低である。統一連邦国家予算の中から各共和国への税の還元となる平衡交付金に相違があり、同じ納税者として常に恩恵を与える側と受ける側という不公平感が存在していた。更にはスロベニアとクロアチアがカトリック教徒であるのに対して、セルビアが正教を奉じているといった宗教を基盤とする文化的な土壌の違いも両国が独立に向かった一つの要因であることも見落としてはなるまい。

問題はクロアチアの場合、全住民の12%、そして国土の3分の1を占めるセルビア系住民の集中する地域、クライナ地方などが含まれていた。加

えて第二次世界大戦中にナチスドイツの支援を得て、ドイツの傀儡色の濃い独立国家クロアチアがあった事も、新国家承認に当たってEC内部での問題点となった。何故なら、当時独立国となっていたクロアチア政府がナチのユダヤ人弾圧や追放のやり口に倣って国内のユダヤのみならず歴史的に対立関係にあったセルビア民族の圧迫、掃討を行ったため、セルビア民族側もその報復を行ない、多くの虐殺が起こっていた土地であったからである。したがってアメリカを始め、フランスなどもユーゴ各共和国への分割、独立には慎重な態度を示していた。然し、統一を完了したばかりのドイツの外相ゲンシャーは東西分断時代、ドイツの悲願であった単一民族国家の回復とその国際的な承認という大義を関係諸国が認めてくれた事、そして同じ尺度をスロベニアやクロアチアに apply することは当然の理であるとECに強く働きかけた。ドイツからのクロアチア承認への強い要請と、そして、今後ドイツのECにおける活躍を一層の期待をする国々のドイツとの協調を望む気持ちを考慮に入れても尚、ECには躊躇が残った。然し最終的にはスロベニアとクロアチアのユーゴスラビアからの分離、そして独立を承認する運びとなった。これがユーゴ崩壊、民族紛争、そして悲劇の始まりとなったのである。

何故なら独立主権を持つユーゴスラビア連邦国内において反逆的な分離主義活動を行うグループに対して治安対策としてユーゴ連邦軍の力で鎮圧を行うのは主権国家に認められた権利の行使である。独立国家相互の戦争となると話は別である。そうすると図式は変わり新ユーゴが対等な他国に行う侵略行為となってしまうからである。戦火はスロベニアからやがてクロアチアへと拡がって行く。1992年、独立を宣言したボスニアヘルツェゴビナの場合、ムスリム系4割、クロアチア系2割、セルビア系3割と三つの民族が共存する複雑な民族構成の共和国である。独立を問う国民投票において共和国の3分の1近くを占めるセルビア系住民の多数は投票をボイコットした。セルビア系住民は統一ユーゴ連邦では多数派であっても分割さ

れた新国家では少数派となるからである。それにも拘わらず賛成多数で独立は認められ、ECも又承認を行った。案の定、武力に訴えた三つ巴の民族抗争に点火し、その凄惨な争いは泥沼化していった。

ここで90年代のコソボ問題の歴史的な経緯を辿ってみよう。アルバニア系コソボ住民が、91年10月、自主的に行った住民投票の結果が示す圧倒的多数の支持によるコソボ独立宣言も新国家の大統領も、コソボの場合は、ユーゴ連邦下の一共和国ではなく、セルビア共和国の一自治州である、つまり、完全な国内問題としてセルビア側に力づくで押さえ込まれ又国際的にもその独立を認める国はなく精々、自治権回復の要求に共感を寄せる域を出ることはなかった。コソボの首都プリシュティナにおいては政治的な抑圧の強まる中でアルバニア系住民が剥奪された自治権の回復と更に独立国承認を求めて抗議を示す集団散歩という形の控えめなデモが繰り返されていた。アルバニア系住民側からすれば、6年間もの間、静かなデモ行進を粘り強く続けても政府、国際社会共に何の反応もない。平和行進を何年続けても何の意味もないと次第に焦れてくるようになる。

1997年に入ると住民運動の前衛グループ、KLAが誕生する。彼等は意志表示の方法として実力行為によるアッピールへと運動方針を変えてゆく。非番時を含む警官の拉致、狙撃、政府公共物の破壊等と彼等は暴力的ゲリラ行為に走るようになる。このような過激な分離主義者、国家への反逆者に対しては当然官憲が取り締まりを強化する事になる。弾圧、そして掃討行為へとエスカレートするのは自然の流れであった。政府側から見ればKLAは反国家的な、テロリストであり、治安の対象になるのに対して、コソボ住民側から言えば彼等の意志を代弁してくれる命を賭けて闘う民族解放のための殉国の志士である。つまり、この場合、正義の解釈の次元が異なっているのだ。昼間農作業をしている青年が夜になると組織に属する解放軍兵士となる。顔の見えないKLA兵士の動静をどう探知し、合法的に一斉検挙し、暴力の根を絶

ち切ることが出来るのか。強い民族意識と団結力で政府に構えているアルバニア系住民の共同社会からKLAについての情報提供者は期待できない。このような状況ではゲリラの実体が全く掴めないで官憲の側からすれば、コソボ住民は皆政府の敵に見えてくる。畢竟、警官側は我が身の自衛上からも先制攻撃を行なうようになる。当然ながら誤認逮捕も起こる。疑わしき者はすべて拘禁、そして警官の直接暴力による懲罰としての仕置き、拷問、その家族を含めた容疑者への報復とその対象は拡がってゆく。あげくの果てはゲリラ拠点と疑われた村全体がセルビア側の警察や民兵に襲撃を受ける。或いは焼き討ちをされ、老人、女性、子供を含む残虐な死体が後に残されるような事態にも発展する。

※ ナポレオン戦争当時スペインで guerrilla という言葉が誕生して以来この戦法に対しては無差別殺戮の応報を生むのが常となっている。

今回もそれはニュースとして世界中に伝えられた。こうした痛ましい多くの事件からいたたまれなくなった住民が住み慣れた村や町を離れて難民となり国境を越えて安全な国へ逃れようとして彷徨する。これがコソボの世界であった。

村単位の襲撃と放火、民族浄化、集団殺戮を行っている国としてミロセヴィッチ政権打倒の国際世論は昂まってくるのは当然である。ethnic cleansing, holocaust, genocide, pogrom などの用語でコソボアルバニア人をナチドイツ時代のユダヤ人に、一方セルビアの民兵や警官を、ナチ党突撃隊員SAとか、Gestapoに見立てたイメージの類型化が西側の報道過程で作られてゆく。また、難民を仕方なく受け入れる側の国々も、はた迷惑である。何とかしてくれと主権国家の国内政治のありかたに干渉せざるを得なくなる。つまり今回のNATOによるコソボ介入を誘う原点となった。そのNATOの空爆は誤爆を含め非戦闘員である少なからずの数の一般市民への被害をもたらした。NATOの正当性は如何であろう。NATO軍の設立趣旨は本来防衛的なものである筈ではなかったのか。今回は加盟国の中のどの国も他からの侵

略を受けてはいない中での出動である。空爆についての国連安保理決議もない。今回の空爆を極言すれば「人権」を掲げて行動すれば何事も天下御免である。などの疑問も指摘されている。それを宗教上の異端者を弾劾した中世の魔女狩りの復活と見る人すらある。いずれにせよ、コソボの場合、はっきり言えることは、双方民族間の憎しみが歴史の中で培養され蓄積されて、第三者の力による介入や調停くらいではどうにもならない域に達している事が問題である。正に「病膏肓に入る」状態となっている。民族間の対立感情が払拭されれば人権問題もおのずと解決に向かうであろう。

Ⅲ 少数民族の民族自決要求運動と大国介入の恣意

ところで Satan, 悪魔とは、元々神に使える天使 angel の一人が神に背いた場合、その廉によって問題の天使は墮落天使 a fallen angel となったものである。その別名が Satan 悪魔とも言われた。それが本来の意味である。天使とは「上」の意をそのまま「下々に」伝えるのが役目の伝奏者であり、追従者である。一方、悪魔とはその体制に対する異端者乃至反逆者である。秩序とか伝統の維持を「善」と見ればその破壊を試みる行為は「悪」となる。然しクーデターや革命も成功すれば価値観は逆転し、それは正当化される場合が多い。例えばオリヴァークロムエルは、国王への反逆者であり、近代議会制政治の申し子として現在ウエストミンスターの地に銅像として残る歴史上の英傑であり、アイルランドへの残忍な侵略者である。要は倫理上の基準点を何処におくかであろう。

宗教、言語、生活習慣の異なる民族がある国家の特定地域に集中して居住している地域を抱える国においては、その国の多数派民族との間で感情的な摩擦を起こし易い。その地域の民族自治権の獲得から更に独立へと進もうとして政府及びその国を構成する多数派民族と対立し内戦へと発展する場合が多い。それは何も今始まった現象ではない。両大戦も或る意味ではこうした大国に組み入

れられた少数民族の不満が起爆剤になってことが始まり、これに他の国々が介入してゆき火災を拡げている。

アルバニア系の住民の多くが住むコソボに、隣接する独立国アルバニアがあるように、セルビア共和国の北部にはハンガリー系住民の多くが暮らすヴォイヴォディナの自治州があり、その地はハンガリーと国境を接している。これらに共通しているのは地理的な直ぐ近くに民族宗主国を持っているという点である。つまり、これら歴史的な産物である境界の線引き自体が不適切で、同一民族の分割状態となっているということである。いずれにせよ、フランス革命、そしてナポレオンの国民国家がモデルになる以前の欧州の各王侯国家では、王室間の国際結婚、外国の技術者の導入や外国人の傭兵を行ったり、又宗教上の迫害難民を受け入れた例もあったりした。民衆の王侯への忠誠心はあっても、同一民族から成る国家を求める意識は薄く、従って他民族への過剰反応も今日ほどではなかった。多民族混成の社会の中で、曲がりなりにも人々は平和に共存していたのがヨーロッパの世界であった。

ミロシェヴィッチの場合、ヒットラー程の民族主義、つまり優生学や社会ダーウイニズムを基礎においた生物学的な血統主義思想の持ち主であるかどうかははっきりしていない。ただ、セルビア共和国以外にも旧ユーゴスラビア全域に散在しているセルビア民族の一体感を主張し、自国内の他民族を圧迫する彼の政策、汎セルビア主義は、バルト海沿岸地域や東欧各地に永住するドイツ系少数民族を糾合しようとしたヒットラーの汎ゲルマン主義と本質において通ずるものがある。彼は大集会を開いて大衆の熱狂的な民族主義の興奮の渦の中で訴え、支持を得ようとするやり方を得意としていた。これはナチの垂流である。大集会や住民投票によって決定を行う直接民主主義はヒットラーの本領とするところだった。populist ミロシェヴィッチの行動は irredentism の発露であり、20世紀末のヨーロッパ社会では到底考えられない anachronistic なヒットラー主義の再燃であると

NATOは断じる。

地理的な条件の他、今一つの共通点は各民族の統合の求心力となっている国家神話又は民族神話である。ナチドイツのアーリア神話は既に多くが語られているのでここでは省略する。北アイルランドとコソボの場合、共通しているのはいずれも過去の戦争に纏わるものである。前者の場合は、英本国から移住したAS系プロテスタント住民と現地ケルト系カトリック住民と間で今日まで続く民族紛争の歴史的な出発点が「ボイン河の戦い」にあった。オレンジ公ウイリアム3世に率いられたプロテスタント側の勝利にその民族神話は起源を由来している。勝利当時の民族感情の高揚はその後季節の祭り、オレンジマンパレードの中で何時も再現される。それは英本国系住民の現地ケルト系住民に対するAS系の民族優位を示威する聖なる儀式となっている。その行進は現地ケルト系住民との間におけるトラブルの原因となり、現在も北アイルランド問題の解決を難しくしている。一方、後者の場合は、正教徒セルビア民族がイスラム教を奉ずるオスマントマントルコ軍に破れ、祖国を失うきっかけを生んだ1389の「コソボ平原の戦い」にその怨念神話の源を発している。戦いの後、その屈辱の地はセルビア民族の聖地となったのである。中世セルビア王国の繁栄と受難の時代を回顧し、そしてセルビア民族栄光の時代の再現を祈願するための歴史的な landmark となっている。

その昔、新バビロニアの侵入により祖国を失ったユダヤ民族は捕囚として異郷の地バビロンに連れてゆかれる。ダヴィデ、ソロモンと二代続いた王国の全盛時代を偲び「バビロンの流れのほとりで」故郷エルサレムのシオンの丘を偲んで涙する物語を旧約聖書は感動的に伝えている。これはセルビア民族の歴史的な叙事詩に何処か通ずるものを持っている。中世、全盛期のセルビア王国時代に建てられたセルビア正教の修道院など多くの遺産が残るコソボの地はセルビア人にとってセルビア文化の発祥地であり、民族の魂の故郷 Heimat である。コソボに寄せる彼等の思いは今尚熱いも

のがある。コソボで住民の僅か一割を占めるに過ぎないセルビア人が、圧倒的に数において優るアルバニア系のムスリムを駆逐し、民族浄化を図ろうとするのはこの神話信仰に支えられた自らの郷土意識に正当性の拠り所を置いているからだと言われている。1989年に6月28日には「コソボの戦い」の六百周年を記念して戦いの行われた記念の地、コソボ平原には50~200万人のセルビア人が集い、ミロシェヴィッチ路線の支持とセルビア民族主義の熱狂的な高揚を示したのである。

※ 人数を示す数字は資料によって様々に異なっている。以下も同じ。

Milosevic is a Hitler. を合い言葉として「人権十字軍」という大包囲網を結成して英米を主導としたNATO軍は小国、新ユーゴという名の「鬼ヶ島」征伐に出かけようとして勇み立った。ところで民族対立による犠牲はなにもコソボだけではない。アフリカでも90年代に入ってそれは起こっている。ソマリア、ルワンダなどにおける人権侵害、大量虐殺に目を覆うばかりであった。国連はPKOを派遣したものの、軽武装兵力による平和維持活動 keeping では犠牲が多く、その割にはその目的の実効を上げることが出来ない事を知った。そこで国連は力の行使による正常化 enforcement も止むなしと判断した。然し、派遣先がアフリカの場合、人権擁護という名誉ある旗印はあっても、各国とも国益に繋がらない点やヨーロッパから地理的にも遠い点に加え、人種上の近親感も欠き、アフリカへの平和維持／強制活動への参加の熱意は低い。民族浄化の被害実数がコソボを遥かに上回っている事実を認めながらも寧ろ紛争に巻き込まれることによる自国の被害に懸念を示している。国連主義を唱え、且つ、国連という機関に向かい合う際にも各国の「大義」と「偽善」は微妙に交錯している。アフリカ諸国の場合、被害当事国からの切なる救援要請にも拘わらず、各国は巧みに言葉を選びながら派遣には慎重な態度に終始した。

今回、NATOの空爆を支持し、地上軍の投入をも辞さないとしてNATOの軍事行動の先駆け

を志願し「文明社会と正義の価値観のために立ち上がった」と自らそう述べている英国首相ブレアの場合、彼を駆り立てている正義の源は果たして何であろうか。EUの将来を見据えて英国の指導権の確立なのか。その一方で、戦乱を逃れたコソボの難民受け入れの数の点で英国はドイツを遥かに下回っており、3分の1にも届かないのが実状であった。¹⁾ セルビアへの軍事攻撃だけがコソボ住民の問題解決とは言えまい。彼の政治姿勢はサッチャーなどに較べれば確かに柔軟である。北アイルランド問題に向かう姿勢、EU統合推進に協力する彼の誠実な態度には評価は高い。国内でのdevolutionを進め、スコットランド、ウェールズにも国防や外交を除いた部門での自治権を認め独立議会の誕生に漕ぎつけている。

ここで北アイルランド紛争の問題に触れてみよう。英国は千年にわたってアイルランド人に対して土地財産の収奪、改宗への強制、母語の使用禁止など実に過酷な植民地支配、統治を行ってきた。

英国政府は何故、コソボアルバニア系の分離主義者のテロリスト集団、コソボ解放軍KLAに錦の御旗を手渡し、その支持を行い、一方では自国において北アイルランドのカトリック系住民にとってKLA同様の存在であるIRAを主権国家に反逆するテロ集団と決めつけ、犯罪者の視点のみから彼等を眺めようとしているのだろうか。これは正に double standard であろう。永年に及ぶ英国のアイルランドへの植民地統治が招いた現地アイルランド人の歴史的な心の傷跡を見ようとはしないで、アイルランドに永住する同胞の英国系移民住民や英本国の選挙民に民族感情の配慮を行っているのかという疑問も残る。

北アイルランドでは一年前の1998年4月10日、プロテスタント系とカトリック系の双方の和平合意が成立し、同年6月25日には北アイルランド議会の議員を選出する選挙も行われた。各党の当選議席に比例して閣僚数を決めて両派が共同の責任内閣を構成する事になっている。英首相ブレアの問題解決に向けての熱意は誰もが認めるところである。然し、その後、一年が経っても新内閣の閣

僚名簿は出来上がってはいない。新内閣誕生の deadline は度々延期を重ねている。コソボのアルバニア系住民及び北アイルランドのカトリック系住民の将来は結局どういう形で落ち着くのだろうか？

IV 東欧革命と壁崩壊への道

1989年とは東欧の社会主義国の多くが次々とその政治体制を崩壊させてゆき、ドミノ現象を招いた年であった。20世紀においてヨーロッパ地図が書き換えられた第一次世界大戦及び第二次世界大戦終結期にも較べる事の出来る年だと言い得るであろう。そのポーランドはナチドイツの占領状態をソ連軍の手によって解放された後も、数十年に亘る共産主義体制による統御のくびきを解き放つ事が出来なかった。80年代に入って改革が始まり、政府にストライキ権を認めさせた自主労組「連帯」が誕生したが、82年民主化運動は政府によって弾圧を受け、一時は挫折を見る事になる。「連帯」は非合法化された。然しそうして政府が自主管理者能力を示すことでソ連軍の介入を防いだ面もあったと指摘されている。ブレジネフドクトリンの見直しをゴルバチョフが明言したあとを受けて88年には反対派を交えた円卓会議構想が発表され、それは今後の複数政党政治への展望を開いたのである。89年2月、政府と反対派は同じ円卓を囲んで諸問題について話し合いの場を持った。「連帯」は再び合法化される。89年6月には始めて自由選挙が行われた。「連帯」は圧勝する。これによって第二次大戦後40年間以上にわたってポーランドの権力を独占してきたポーランド統一党、つまり共産党の支配に終止符が打たれ、非共産党政権が誕生したのである。

同じ時期、他の東欧諸国の様子はどうだったのだろうか。

チェコスロバキアでは1968年1月、党の指導者の地位に就任したドブチェクは圧倒的な民衆の支持を受けて改革に乗り出し表現の自由を認めた。彼は社会主義の原則や理念に背くつもりはなかった。社会主義本来の持つ利点と自己表現の自由を

持つ西側民主主義の価値を結合し、より良き社会主義、つまり、人間社会主義の創造に我が身を挺する覚悟であったと言われている。チェコスロバキアにおいて始まろうとしていた言論や集会の自由、出版物への検閲制度の廃止、旅行の自由などの動き「プラハの春」に警戒感と苛立ちを抱いていたソ連は、偶々、ワルシャワ条約機構の軍事演習があつてチェコスロバキアに駐屯していた軍隊を演習延期の口実でそこに引き留めてこの国の様子を窺っていた。両国の首脳会談を行おうとソ連側から持ち出される。ドブチェクは微かな不安は予感したものの、快くこれに応じた。7月28日、ソ連との国境に近いチェコスロバキアの町チェルナで会談は行われた。ソ連側の代表者ブレジネフは現在行われようとしているチェコスロバキアの改革の動向に不満を示し、ドブチェクはそれに反論し弁解を行う形の中で数日が過ぎた。そのやりとりの雰囲気、内容や経過について、憶測は色々飛び交っているものの、すべては藪の中ではっきりしていない。最終的にはソ連側の出したコミュニケにドブチェクが同意したことになっている。

68年8月21日の夜、ソ連軍を中核としたワルシャワ条約機構軍の兵力50万は1500台にも及ぶ戦車に先導されて堂々とプラハ市内に入ってきた。チェコスロバキアにとって20世紀の歴史の中でこのような他国軍の侵入は1939年ナチスドイツによるプラハ占領以来の経験であった。その時はその一年前より一連の対立、緊張の経過があつてチェコスロバキア人にとっては或いは首都プラハへの侵攻といった事態の到来もあるかと心の構えは出来ていた。今回は同じ社会主義国でしかも友邦関係を持つソ連軍の突然の侵攻であったので人々の驚愕は計り知れないものがあつた。68年ソ連軍はプラハ侵入と同時に改革活動家に就いて予め調査されていたリストの名簿に従って「修正主義者、反革命分子」のレッテルを張った上で多数を逮捕並びに身柄拘束を行った。それに対して民衆の抵抗運動は道路交通標識を差し替えたりして、侵入したソ連軍に混乱を与えたりした他、色々な形で行われたが、僅か数日で制圧された。死傷者は少なかっ

た。「プラハの春」の挫折は正にブレジネフドクトリンのモデルを世界に示したものとなった。ソ連にとっては社会主義大連邦の圏内においてその結束を乱す恐れのある「自治権要求」は社会主義の体制崩壊に繋がると考え、その引き締めを行ったものであろう。ともあれ独立国家チェコスロバキアの主権は無視され蹂躪されたのは紛れもない事実であった。

※「プラハの春」で見落としてならない今一つの点は、チェコとスロバキアの民族問題での両者の差別感情や確執である。チェコスロバキアの共産党の中で、チェコ人を中心とした守旧派の旧執行部対スロバキア人を率いて改革側に立つドブチェクといった図があった。第一次世界大戦後出現したチェコスロバキアは、両者の産業発達に伴う収入格差や使用言語の違いがあり、そもそもジョイントの単一国家としてやってゆくには無理があった。民族問題には感覚の聡いナチドイツはズデーテン問題に端を発し、チェコ人優位の国家を解体させて、スロバキアは独立させていた。セルビア人優位のユーゴにおけるクロアチアの場合と同様である。東欧革命の後クロアチアはユーゴと大立ち回りの後、そしてスロバキアはチェコと円満な協議離婚を行って、現在は別々の国になっている。

時移り、1989年11月、学生デモに端を発した民主化要求運動は高まりを見せ、その結果、共産政権は崩壊した。この政治的な変動は殆ど暴力事件を伴わないで進行したため「ビロード革命」と呼ばれた。ハヴェルは「プラハの春」の時期に改革のための政治的な提言を行っていた人物である。89年12月、チェコスロバキアの大統領に選出された。

ルーマニアにおいては体制改革はこのように円滑には進まなかった。ルーマニアでは1989年12月16日ハンガリー系住民が多く居住している西部の町ティミショアラでデモが起こった。少数民族ハンガリー系住民の人権擁護の活動をしていた教会牧師が国外でルーマニアの体制批判をしたため所属の教会から期限付きで退去するように国家命令が発せられた。これに対して、ハンガリー系の信

徒達は抗議した。牧師を官憲の手に渡すまいとした人達は手と手を結んで人間の鎖を築いた。これが騒ぎの発端であった。デモは次第に膨れ上がってゆき、その抗議の標語もハンガリー系住民の掲げた一牧師の擁護請願から広く一般の人々をも糾合したチャウシェスク政権打倒へと一本化された。町は包囲され、通信手段は途絶状態となるが、やがて民衆の燃え上がる心の炎は首都ブカレストへと飛び火して拡がりをみせる。鎮圧する治安部隊との衝突で既に流血の事態は発生していた。折しもその時期に大統領はイランへの公式訪問の日程を抱えていた。事態の推移の重大性に気付いていなかったのか大統領は暴徒への鎮圧を治安当局に託して予定通りにテヘランに向かって出発した。その留守中に暴動はさらに拡がりを見せていた。軍、特別保安警察は共に民衆に向かって発砲することを拒むに至る。大統領自らが大統領宮殿のバルコニーに立ち群衆を鎮静すべく演説を始めるが、逆に野次り返されて今やその権威の失墜を白昼に晒す結果となった。群衆は雪崩を打って宮殿に押し入ってくる。大統領夫妻は宮殿屋上からヘリコプターを使って逃亡を図る。然し結局は捕まって略式裁判を経て処刑される。この暴動の犠牲者は数千人と言われているが未だにその実数の把握は出来ていない。

チャウシェスクの在位中、妻の他、13人のチャウシェスク親族が国家の重要ポストを独占していた。又、国内の少数民族の人々の姓名や使用言語に対する同化政策強制を遂行していたブルガリアに継いでルーマニアも国内の少数民族への圧制者として知られていた。国民が食糧不足に陥った時、配給量を減らす為の大義名分として食料摂取の減量が健康上望ましいとその必要性を説きその施策を実行した。「ダイエットマルクス主義」という皮肉な言葉が民衆の間より生まれたのもむべなるかなである²⁾。

V ベルリンの壁崩壊の序曲

ところで1985年の春迄にはソ連及び各東欧諸国の所得の落ち込みが激しく、将来に向けての経済

状態の展望が危機的な状況を示していることはソビエト政治局 Politburo にとっても明らかになっていた。石油を輸出して外貨を稼ぎ、その金で原材料や機械を購入してきたソ連にとって80年代半ばの石油価格の暴落は打撃であった。加うるに長期に亘るアフガニスタンへの軍事介入による出費や東欧諸国に展開するソ連軍の駐留費に加え、米ソ間の核兵器を中心とした軍拡競争など軍事費の負担は国民生活への圧迫となっていた。そこから何とか抜け出す方法の模索が始まった。ゴルバチョフは書記長就任と同時に米国との核兵器の相互軍縮への交渉を本格的に開始し、1987年12月には中距離核兵器の全廃の条約に双方が署名した。88年にはアフガニスタンとの戦闘を停止し、その地よりのソ連軍の撤兵を宣言した。東欧諸国に対しては各国独自の創意工夫による経済改革を促した。

1988年ハンガリーの首相にネーメトミクローシュが就任した。彼は共産党による一党独裁の社会主義体制の改革に着手したのである。ハンガリーは前政権の当時より個人企業の育成、西側との交流、言論統制などを規制する点で他の東欧諸国よりもやや緩やかな対応が行われていた。ハンガリーは同年、同国民を対象に国外旅行を希望するものにはその自由を与えた。89年5月2日には64キロにも及ぶハンガリーとオーストリアの間を隔てている国境の有刺鉄線をとりはずした。それを行うに当たっては当時国内に駐留している6万人にも及ぶソ連軍の動向が気懸かりであった。

嘗てスターリン死後、ソ連共産党書記長フルシチョフの行った非スターリン化、冷戦体制の雪解けムードのあとを受けたハンガリーにおいて1956年、街頭デモなどを含む大衆の民主化運動、そして上からも党指導者イムレナジにの下で改革運動が進行していた時期があった。それはオーストリアとの国境の解放、ワルシャワ条約軍事機構からの脱退、ハンガリーの中立化、複数政党の容認、国際監視による自由選挙の実施などの提案など画期的な改革的提案を含むものであった。然しそれは同時に東側体制の基幹を揺るがすものとしてソ連による内政干渉とハンガリー駐留ソ連軍の軍事

介入を招いた。今日、分離独立を意図するコソボ住民がこの場合のハンガリーであるなら、新ユーゴ政府はソ連にも譬えられよう。ハンガリーの場合、多数の民衆の死傷者、国の政権を担当し最高指導者であったナジをも含む改革関係者の逮捕と処刑を出すという空しい結果に終わった。

1956年におけるハンガリー動乱の時の改革運動の惨めな挫折はハンガリーの指導者の心に歴史的な経験、教訓としてしっかり生きていた。ソ連軍の介入という恐怖を取り払い、改革行動に取り組む際にも慎重な対応を行うことが最大の課題であった。ソ連軍戦車の再来を今回は防ぐためにもハンガリー首相は事前に訪ソしてソ連ゴルバチョフにこの件での黙認を取り付けておくという、用意周到な手順を行っていたのであった。この柵撤去のニュースが全世界に伝わるとそれは西側世界への脱出を望む東ドイツの人々にとってハンガリーを経由して中立国オーストリアへ、そして西ドイツへ移動の夢と可能性を示唆するものとなった。東欧社会主義国へのみ国外旅行が認められていた東ドイツの人々が挙げてハンガリーへ移動を開始した。これまでも東ドイツの知的・技術的職業分野の人々や熟練労働者を中心とした人達は休暇を楽しむためチェコスロバキアを通してハンガリーを訪れていた。夏の間賑わいを見せる保養地バラトン湖のほとりにはその年、西側への移住を求める人達が多く集まった。テントを張りオーストリアへの脱出の機会を窺っていた。ハンガリー政府としては自国の人々に国外旅行の自由を与えたものの、西側へのパスポートを持たない他国の人々に西側への抜け道として利用される事には東ドイツとの友好関係を損なうものとして聊かの躊躇いがあった。そこでこれらの政治難民が無事に脱出出来るその手助けとなるようにとハンガリー国内の人権市民団体が計画した一案を政府も陰から支援するという態勢をとったのであった。つまり国境線に添った町ショプロンで夏の一、「汎ヨーロッパピクニック」と銘打って東西間交流の野外集会を開く。当日は、一定の時間、国境の門を開き、東西の世界からびざ無しで自由にそのピクニック

クに参加して国際交流の場を持つ。その際に東ドイツの人々を巧く脱出させる。この民間団体によって計画されるその脱出劇にハンガリー政府は阻止の行動は採らない。と言ったシナリオが案出された。その計画が持つ真意をハンガリーに滞在する東ドイツ人に伝えるための手段として‘クチコミ’の他、ドイツ語で書かれたポスターが随所に張り出されたのである。

こうして8月19日約千名の人々が脱出に成功した。ハンガリー政府は最早後には退けない。8月22日には政府主要閣僚が協議し合法的な方法で東ドイツ人の西への移動を許可する事に踏み出すのである。8月25日にはハンガリーの首相及び外相は西ドイツに向けて秘密裏に飛び、コール首相ゲンシャー外相と会談を行い、避難民受け入れの了解を取り付けた。そして8月31日には同じく東ドイツに赴き、首相外相会談でその旨を一方的に通告する。それまで足止めにあっていた東ドイツの人々はハンガリーの西ドイツ大使館から交付されたパスポートを手にして9月11日から堂々とオーストリーを経由して西ドイツへと移動を開始する。そして到着先では同胞としての暖かい歓迎を受ける。

こうした動きはやがて他の東欧諸国にも波及した。チェコスロバキアの首都プラハ及びポーランドの首都のワルシャワの西ドイツ大使館にも東ドイツから西への脱出を希望する人々が殺到した。東独政府が人道的見地による措置としてこれらの人々の出国を認めざるを得ないところまで追い込まれたのである。チェコスロバキアの首都プラハから東独経由の特別列車で続々と西独へ移送が実現した。それは西独外相ゲンシャーの粘り強い働きと同時に、最早抗しがたい時の流れによるものであった。このような経過を辿って脱出劇‘exodus’のドラマはクライマックスを迎える。9月には3万5千人、10月には5万5千人、そして11月には13万3千人の東独市民が西独への脱出を果たしたのである。

VI ベルリンの壁崩壊

10月4日、東ドイツでは建国40周年を祝賀する盛大な式典、そしてパレードが挙行された。東独ホーネッカー国家評議会議長はルーマニアのチャウシェスクと共にゴルバチョフの改革路線への理解に疎く、その影響を受けることを頑迷に拒んでいた。記念式典における彼の演説は従来の社会主義体制への礼讃と守旧的態度に始終した。その内容は訪れたゴルバチョフを失望させるものであった。昨今の世界は日々変わりつつあり各国ともその変化に対応する柔軟な姿勢を持たねばならないとゴルバチョフは述べる。暗にホーネッカーの頑なな態度を批判するものに他ならなかった。又記者会見の席でかの有名な言葉「遅れてきた者を人生は罰する」が彼の口から発せられる。ゴルバチョフのホーネッカーへの信任が最早失われた事を聴く感じとった東独政治局は素早くホーネッカーの更迭を画策する。そして10月18日には政治局の若手クレンツの選出が行われたのであった。

9月始め以来、東独ライブチイヒの聖ニコライ教会を起点として月曜日毎にデモが行われるようになっていた。自由選挙と西側への自由旅行を要求するデモへの参加者の数は10月9日には7万~10万人へと膨れ上がった。人々は口々に「我々が国の担い手である人民だ」Wir sind das Volk.を唱えて即刻に変革の要求をおこなった。

11月4日には東ベルリンのアレクサンダー広場には70~100万人が参加し、最大の集会となった。これらのデモがいずれも暴動に発展しなかったのは運動形態として教会の指導もあって非暴力による誓願運動の方針が隔々にまで徹底していたこと、同年6月3日に起こっていた北京の「天安門」におけるような暴力沙汰を呼ぶ事態を回避しようとする意志が最終的に当局、デモ側の双方に働いていたこと、そして東ドイツに駐留していた40万近くのソ連軍が兵営内に留まっていた介入の動きを全く見せなかったことなどによる。

東独国民の大量の国外脱出、繰り返される毎に盛り上がりを増す大衆のデモ、そしてソ連のバックアップを失うという予期しない異常事態の連続

となった。国の舵取りに自信を失った東独政府は11月9日「ベルリンの壁」を含む東西ドイツ国境の解放と旅行の自由の許可を認める発表をせざるを得ない羽目に追い込まれる。そして運命の「ベルリンの壁崩壊」となったのである。ベルリンの壁の崩壊はテレビ放送を通して全世界にその映像が伝えられた。正に歴史を二百年遡ると、世界と歴史を大きく動かすことになるフランス革命のファンファーレを告げる「バスチーユ牢獄」の壁が外から崩壊したのだった。今回の壁は内から崩壊した。革命は成就したのである。しかも無血で！

これに先立ってその同じ年、1989年の2月5日、ベルリンの壁を越えて西に行こうとした東独の青年二人が東独の国境警備隊に発見され、発砲されてその中の一人は死亡する事件が起こっていた。1961年の壁構築以来、逃亡を企ててその命を落とした人々の数は263名にも達する。彼はその最後の犠牲者となったのである。壁崩壊まであと僅か9ヶ月という時間差を思う時、何としてもその死が悔やまれる。

その昔、エジプトの地で奴隷状態におかれていたユダヤの民はモーゼに率いられてその地を脱出した。無事に紅海を渡るため彼は奇蹟を行った。旧約聖書「出エジプト記」の物語の奇蹟が11月9日の夜、ベルリンで再現したのであった。東西ドイツの人々はブランデンブルグ門を通り抜け、始めて出会った者同志が互いに抱き合い、涙ながらに、かの懐かしのドイツ国歌、ハイドンのメロディを当て、ファラースレーベンの作詞による「世界に冠たるドイツ」その歌詞が示す祖国ドイツ、統一と、自由を祝っての大合唱を行い、そして壁の上で踊ったのである。

壁が開いて3日目に西ベルリンの中心地 Zoo 駅近くに建ち、戦災の跡をそのまま残して、広島原爆ドームと並んで世界の平和の象徴となっているウイルヘルム皇帝記念教会で開かれた日曜礼拝には東西の人々で満ちあふれた。1985年5月8日、ドイツ敗戦40周年の記念演説で「過去に向って目を閉ざす者は現在にも目を閉じた事になる」という感銘的な言葉を残した事で世界的に知られてい

る西独大統領ヴァイツゼッカーも出席していた。その際、市民への挨拶の言葉として彼は次のパウロの言葉「ガラテア人への手紙」第5章13節を引用し締括っている³⁾。

キリストはこの自由へと私たち解き放って下さったのだ。それゆえに、あなたがたは堅く立って、再び奴隷状態のくびきにはまってはならない。…実際、あなたがたは自由へと召されたのだ。兄弟たちよ、ただその自由を、肉に向かう機会のために用いず、むしろ、愛をとおしてあなたがたは互いに仕え合いなさい。

ウイルヘルム皇帝記念教会の近くの目抜き通りの中央分離帯を跨ぐように「ベルリン」という題名の現代彫刻の像が建っている。その像は人が両手で合掌をしているように見える。両手はそれぞれ当時分断されていた東西世界を象徴している。両手を組み合わせたそのデザインの中に制作者の両世界統一を祈る思いが見る人々に熱く伝わってくる。壁が崩壊した今、分断された時代を思い起こさせる永遠のモニュメントとなった。

そもそも壁、そして城壁 Mauer と言うのは外敵の侵入から市民を守るために築かれるものである。ローマ帝国がその辺境の地に築いた壁 Hadrian's Wall、更に遡って旧約聖書に出てくるジェリコの城壁など皆そうである。然しベルリンの壁の場合は自国民の他国への流出を防ぐための装置であった。壁脱出者を発見する監視塔、発見時のサーチライト、警報装置、逃亡を防ぐ地雷原などが設置されていたのである。これらのマシンは刑務所における囚人の逃亡を防止する装置そのものである。社会主義体制を守る為に置かれた国家保安省シュタージ Stasi 即ち、反体制者を抑圧し、疑わしき者を当局に密告するシステムまで設けて個人情報の国民総背番号化を行い、それをファイルして管理の徹底を図ってまで既存の体制を守ろうとしたのであった。一体、社会主義国家とは何だったのだろうか。国家を「牢獄」状態にしておかないと社会主義政治は維持できなかったのであろうか。東西を結ぶ門戸が開かれて統一の機運は一挙に加速した。11月22日に行われたライブチッヒのデモにおける標語 watchword は

東西ドイツ民族の一体化を叫ぶ「ドイツ人は一つの民族だ」Wir sind ein Volk. と変わっていた。

Ⅶ 東西ドイツの再統一と壁崩壊後の世界

大衆運動に押されて西独首相コールは11月28日連邦議会で「ドイツとヨーロッパ分断克服のための十項目計画」を発表する。それは将来の統一を踏まえたドイツが進む方向としてヨーロッパの一員としてその秩序の枠内で行動することを内外に示したものであった。統一後のドイツの独り歩きを心配する米ソ英仏の戦勝四カ国のみならず大戦を通してナチドイツの軍靴に踏みにじられたポーランドなど近隣諸国を安心させようとするものである。これによって統一後のドイツがその一員としてEUの積極的な担い手となるという将来への展望が生まれてきた。当時はまだゴルバチョフ政権も自国内での安定した政権基盤を持っていた。レーガンの後を受けた米大統領ブッシュとの個人的な相互信頼関係も極めて良好な時期であった。このような時代環境の追い風にも助けられて、コールは東西ドイツの通貨統合を手始めに一挙に統一へ向けて様々な隘路をくぐり抜けそのタイムテーブルを加速させた。NATOへの帰属や領土問題の最終的な決着など東西統一によって付随する問題を一挙に解決した。この難しい諸懸案が解決を見たのは冷戦を解消し、自国の財政を建て直すため必要な資金援助を富める国旧西ドイツから調達し導入したいというソ連側の政策上の priority があったことも否めない。ともあれ、ゴルバチョフの大胆な決断に負うところが大きかった。

中世、地球が平らと信じられていた時代の世界観をコロンブスが、そしてマゼランが見事に取り払ったように、ゴルバチョフは壁によって往く道が遮られ、行き止まりとなっていた平面世界から丸い地球を取り戻してくれたのである。彼等は大西洋の彼方に、そして東西の壁の向こう側に別の世界がある事を人々に教えてくれた。それまで一般の東欧の世界の人々にとっての西側へ旅行出来た人は月面に降り立つことの出来た宇宙飛行士にも較ぶべき希有な存在でしかなかった。壁崩壊後

は良くも悪くも西側の世界の現実を自分達の実目で確かめる事が可能となった。ゴルバチョフはコロンブスに継ぐヨーロッパ世界の、否、地球上の多くの人々の恩人となったのである。

ベルリンの壁崩壊後一年未満の1990年10月3日、統一ドイツを再生させたコールもまた1871年ドイツ統一を完成させたかの名宰相ビスマルクに続いてドイツ歴史上における輝かしい快挙を成し遂げた歴史的な人となったのである。ビスマルクは「鉄と血」の力と外交を巧みに使い分け、そしてコールは「ドイツマルク」の力と外交を巧みに織り交ぜて不可能と思われていた事柄を見事可能にしたのであった。

世界を二分する影響力を持ったソ連はその無理な拡大主義の見栄が災いのもととなってそのイデオロギーと共に僅か一世紀足らずにして潰えたのである。その積もった負債とそれに伴う混乱ゆえにその看板を降ろし、やがて閉店の運命を辿って行く事になる。毎年5月1日の華やかなメーデーには社会主義国の宗家として社会主義体制の成功と繁栄ぶりを世界に向かって披露すべく大示威パレードがクレムリン広場で行われていた。それは人々が歴史の一瞬に社会主義の栄光をかいま見た、うたかたの夢でしかなかったのであろうか。何処までも続く赤い旗の波、未来に向かって自信に満ち溢れた軍人兵士や各職域労働者の顔、新型兵器を搭載して祭りの呼び物となっていた山車などが勢揃いしていた。社会主義という異教徒の神殿クレムリン宮殿のバルコニーに並んだ指導者達の姿はオリンパスの神々の再来さながらであった。この20世紀の現人神たちの生きた肖像も社会主義体制国家の消滅と共に layman の眼からは既に離れてしまった。ともあれ社会主義国家の全盛時代、世界に向かって示した覇権の期間は基督教の生命力には勿論の事、数世紀に及んだローマ帝国や大英帝国の栄光の時代の記録をも破るには至らなかった。社会主義国家体制がそのたがをはずし、パンドラの箱を開いた結果、中から飛び出てきたものは果たして何だったのであろうか？

社会主義から西側の政治経済システムに移行す

れば魔法の力で一夜のうちに西側の人々が持つ物質的な豊かさが得られると期待した人達もあった。90年代が物語っているようにそれは幻滅に終わった。人々は混乱する経済のなかで商業活動において物々交換で決済を行ったり、19世紀に時計の針を戻して教会に出かけたり、極貧というロシアの冬に耐え抜きながら時折振り返って絢爛たるロマノフ王朝時代の文化への郷愁に春の夢をみたり、或いは、民族主義に救いを見出そうとしているのが現状である。

あ と が き

社会主義体制国家崩壊の後始末として統一後のベルリン地検は旧東独元首ホーネッカーを法廷に引き出した。壁を構築し、越境しようとする自国民の射殺を指揮した最高責任者の罪を問うためである。又、規則／命令によって発砲した国境警備兵士も同時に起訴された。尋問を詰めてゆくことで罪が奈辺にあったかを突き止め、西側の人々の「人権」意識の高さを世に示し、教材化を行おうとした。

今回のユーゴ空爆の最中に新ユーゴ大統領はハーグの旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷のアーバー主任検察官により「人道に対する罪」で起訴された。その指名は世界中に向け電波を通して発表された。余りにも政治的な時を選んで発表されたそのタイミングには眉をひそめる人もあった。ミロシェヴィッチはともかくも新ユーゴにおいて合法的な手続きを経て選出された代表者、国家元首である。勿論、戦争や紛争に乗じて物品の略奪、放火、残忍な方法での殺害、レイプ、などその実行又はその教唆が明らかな場合には誰であれ戦勝者、敗者の側を問わず、その罪は問われなければならない。ところで戦犯追及の裁判は第二次世界大戦後のニュールンベルグ裁判や東京裁判以降はボスニア紛争に至るまで全くの休業の状態であった。一度の空襲で10万人近くの民間人の死者を出した東京大空襲、広島への原爆投下は勿論の事、エルベの河に沿ったあの美しい、生きた歴史博物館とも言われた、

古都ドレスデンへの英米空軍の絨毯爆撃は一夜にして前述の両都市の死者を上回る13万人ともいわれる被害を出した。その多くが木造建築であった日本の場合と違い、歴史遺産への傷跡は今尚半壊か瓦礫となってその姿を痛ましくとどめている。自然界の生態系を破壊したヴェトナム戦争などを含めてこれこそ正に「人道に対する罪」であり vandalism そのものではなかったのか。完勝に終わったその勝利祝賀の祭壇に「戦犯」という名の負け組の指導者を生け贄として要求するのが今日の国際正義なのであろうか。文明期以前の大衆への低俗な見せしめショー kangaroo court とは言えまいか。

歴史はその時代の強者という回転軸を中心にして秩序に従って動いているように見える。その軸自体もやがて磨滅したり、軸足の位置を移動させたりもする。又、歴史は大きな流れにも見える。大河も幾つかの支流が集まって出来上がる。それぞれの流れは衝突、妥協、統合、分裂を重ねながら一つの流れを作ってゆく。また歴史の流れは建築工程のようである。建造物を構成する建築材料の一つ一つの綿密な組み合わせ、積み重ねによって出来上がっているように思う。89年の「ベルリンの壁」に数ヶ月先だつ同年6月4日の戦車と流血を伴う北京天安門事件がなかったならば、どうなっていたであろう。北京程ではないにせよ東独治安当局のより強いデモ規制の警戒網が張られて衝突と混乱を生み、その結果、壁崩壊そしてドイツ統一へとかくも鮮やかに歴史の車輪は前進していなかったかも知れぬ。場合によっては、その後のソ連邦解体、ゴルバチョフの失脚などの荒波に吞まれて統一プラン自体すら暗黒の海底の藻屑として消え去っていた可能すら否定出来ないのである。

ベルリンの壁崩壊は確かに歴史の大きな転換点ではあった。ゴルバチョフの力がそれに大きく結びついている事は確かである。然しソ連の政治改革は彼によって始めて着手されたものではない。そのずっと以前にフルチシヨフによる改革への先鞭があったのである。ハンガリー動乱や「プラハ

の春」は挫折に終わったが、89年に入って改革が本格操業を始めた時、それに先立つナジやドブチェクなどの改革への試みが大きくものを言ったのであった。

コールは統一の立役者にはなったが、その前に東西和解の地ならしをしたブランドト西独首相1969～1974の東方外交 Ostpolitik があっての上での事を忘れてはならぬ。それらは取り出して使える重要な建築部品として生き残っていたのである。過去において失脚や失敗に終わった人々の業績は決してスクラップなどにはなっていないのだ。それは歴史的な経験として役立ち、後から行く人の足下を照らす街灯の役目を立派に果たしたのである。

ゴルバチョフはよく歴史が果たす役割を説く。「大切なのは歴史がすべてである。歴史の先回りをしてでも乗り遅れてもいけない」と。彼の採った行動は歴史の命じるままに忠実に動いただけだと彼は謙虚に言っている。難局に面した国の重大なコンパスを委される迄はミロシェヴィッチもゴルバチョフもそれぞれの社会主義国家において似通ったコースを歩んでいた。その人柄の違いによって歴史はどう変わったであろうか。そして次に将来ヨーロッパ各国が互いに異なった宗教、言語を認めあう寛容な多文化共存の社会になり、統合ヨーロッパの旗の下に力を結集できるEU連邦を実現させる事が出来るのだろうか。そのためには単に通貨統合だけではなく各国で行う歴史教育のすり合わせなども必要となろう。然し、民族主義や力の正義が主となって、抑圧と対立という歴史が繰り返されるのかという疑問も最後迄残されている。それは人間という生き物が果たして理性のメカニズムで動く存在なのか、それともパッションの力のほうが優先するのかという、正にハムレットの

問いかけともなろう。それはドイツの今後を占う鍵でもあり、同時に人間が何であるかを問う根元的な問題でもある。

2000年を期にドイツはボンよりベルリンへと遷都する。過去の歴史を語って余りある旧帝国議事堂は修復されて移転の日を待っている。議論の後、議事堂は帝国 Reichstag の名を残した。私の見上げるブランデンブルグ門の上に載っている近代ドイツ国家の興亡盛衰史の目撃証人である「勝利の女神と四頭だてのカドリカ像」からドイツの未来像を暗示する答えは返ってこなかった。

【注】

- 1) 1999年6月21日 国連難民高等弁務官事務所UNHCR発表の数字によるコソボ難民の出国先はドイツ、14,726人 イギリス、4,191人となっている。
- 2) フローラ・ルイス ヨーロッパ下巻 河出書房新社 228～250頁。
- 3) ヴァイツゼッカー回想録 岩波書店 261頁。

参 考 文 献

- the SERBS.....Tim Judah.....YALE UNIVERSITY PRESS
- Nationalisms.....Montserrat Gijberrau.....Polity Press
- THE TREATY OF VERSAILLES....Manford F.Boemeke, Gerald D. Feldman and Elisabeth Glser....Cambridge
- MODERN EUROPE.....BRIAN GRAHM.....ARNOLD
- the Ethnicity.....Montserrat Guibenau and John Rex.....Polity Pres